

友だちとともに、少しは集中して活動する子

野坂尚史

はじめに

落ち着いて課題に取り組みず、注意散漫、かつ多動。友だち、特に弱い児童への乱暴な行動が多く、自制することができない。物事に感覚的にすぐ反応してしまうK児が、少しは落ち着いて、没頭し、集中する活動は準備できないものか。また、友だちに対して、叩く、押すなどしてその反応を楽しむといった誤学習をしているK児を行動分析的に修正し、直していく手だてはないものか。こうした問題意識をもち、K児について事例研究することにした。

1 プロフィール

(1) 生育歴 昭和55年2月9日生 10歳8ヶ月

小学部5年生 男子

- 水頭症。後頭部随膜瘤のため生後5日めで手術。
- 乳児期は表情乏しく、抱かれても筋の通らない感あり。
- 歩行の獲得が遅れ、1歳半から3歳半までT療育園で週2回の歩行訓練を受ける。(2歳10ヶ月で歩行獲得)
- 3歳9ヶ月と4歳4ヶ月の時に発作を起こす。これを機に発達が遅れる。(脳波の異常が認められる。)
- 4歳～6歳。私立A幼稚園で健常児集団の中で過ごす。
- 6歳～8歳。市立F小学校の障害児学級で過ごす。
- 9歳で本校小学部3年生に編入。行動が活発化。弱い児童への攻撃的な行動が見られるようになった。

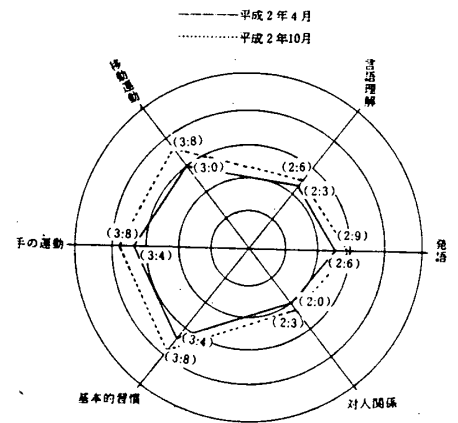
(2) 諸検査等による実態

図1、図2を参照。全発達年齢は、大体2歳半。

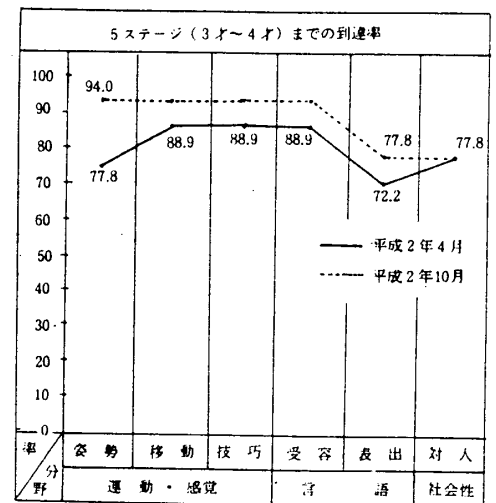
また、各項目を見れば、運動・感覚の発達にくらべて、特に社会性(対人関係)の発達に落ち込みが見られることが分かる。まだまだ発達過渡期であることから、落ち込み部分に直接アプローチするのではなく、運動・感覚分野をさらに伸ばしながら、言語分野、社会性分野を伸ばしていけるような取り組みをしたいと考える。

(3) 行動特性

K児の行動特性を、社会性、からだ、興味・関心の3つの観点からまとめたのが、表1である。K児の行動特性も生かした取り組みを実践したいと考えた。



グラフ1 遠城寺式乳幼児分析的発達検査によるプロフィール



グラフ2 MEPAによるプロフィール

観 点	K 児 の 行 動 特 性
社 会 性	<ul style="list-style-type: none"> ・「だめ」と禁止すると、その事に増々固執し、自分が何をしているのか忘れてしまう。 ・友だちに対して、ちょっかいや乱暴な行動が多いため、協調した活動ができない。 ・感覚運動遊びの段階で、思考した行動ではなく、感覚的な快を求めた行動が多い。
か ら だ	<ul style="list-style-type: none"> ・手足の分化ができておらず、器用さを要する活動はできない。 ・下半身が非常に弱く、ころびやすい。
興 味 ・ 関 心	<ul style="list-style-type: none"> ・歌をうたうのが大好きで、いろいろな歌を大きな声で上手にうたうことができる。 ・絵本の読みきかせをしてもらうのが大好きで、よく読んでくれとせがむ。 ・非常に動物好きで、ねこ、にわとり、犬などととてもよくかわいがる。

表1 K児の行動特性

2 取り組みの構想

(1) 指導仮説

上記の実態を踏まえ、K児が友だちと協調的に関わり、友だちとともに、少しは集中して活動できるように指導仮説を次のように設定した。

個人目標 友だちとともに、少しは集中して活動する子

つきたい力	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちとの協調的な関わり方（友だちとの関わり） ・「がまん」ができ、目標を目指してがんばる力（気持ちのコントロール、持続力） 	<ul style="list-style-type: none"> ・熱中して活動できる力（集中力） ・感覚総合の促進、下半身の強化（身体の分化、強化）
-------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------

からだづくりからの取り組み

からだの個人目標 歌や身体表現活動、及び粗大運動で取り組める楽しい遊び活動に、友だちとともに熱中して取り組む子

仮説 K児の行動上の大きな問題点として、注意散漫、多動が挙げられるが、それは、K児の活動意欲を喚起する課題が与えられていないからだとも考えられる。K児が興味・関心をもつ課題で、かつK児にできる課題を我々が準備すれば、K児は少しは集中持続して活動できるのではないかと考えた。

また、友だちとの協調的な活動ができないという問題点についても、K児の好きな課題を媒介にして関われば、友だちへのちょっかいではなく、目的的な活動の中に自己のエネルギーを投入して友だちと関わることができ、この経験のくり返しが、友だちとの好ましい関わり方を形成していくのではないかと考えた。

その他の取り組み

K児は、これまでの生活の中で、様々な誤学習をしている。友だちへの攻撃行動、教師の指示に対する寝ころび行動など数えればきりが無い。それらは、すべてK児をとりまく環境（特に人的環境）によって形成されたものであると考えられる。そこで、生活全般の中で行動分析学に基づき、好ましい行動は強化し、問題行動は消去していく取り組みを行った。

図1 K児の指導仮説

(2) 指導の手だて

- ①からだづくりを通して積極的に望ましい行動を作っていく取り組み（主として生活単元学習）
- ②からだづくりを目的として行った取り組み（養護・訓練、体育）
- ③K児の表出する行動に行動分析的に responding していく取り組み（学校生活全般）

以上、3つの取り組みの柱を設定してK児の指導に取り組んだ。

（ここでは紙面の都合で①のみ記す）

学校生活において、決められた学習時間はあるが5分も集中持続できないK児にそれを強制することはできない。少し「がまん」して取り組めたら、K児の好きな事をさせるといった方法で、集中持続時間を少しずつ伸ばしていくようにした。また、そのごほうびの内容もK児の好きな活

動の中でも、からだづくりに役だつもの（たとえば自転車乗り等）を採用するように配慮した。

3 指導の実際

「からだづくりを通して積極的に望ましい活動を作っていく取り組み」について

(1) 生活単元学習「たなばた発表会」一劇活動一の取り組み

本校小学部では、6月下旬から7月上旬にかけて「たなばた発表会」という単元を組んでいる。この単元では、たなばたにまつわる話を聞く、笹飾り・たなばた飾りを作るという内容の他に、クラスごとに劇の発表をすることになっている。歌や身体表現活動が大好きなK児であるだけに絶好の課題であると考え、この劇活動を取り組みの場の1つと決めた。

○劇活動についての基本的な考え方

劇は、昨年中学部の生徒が学習発表会で上演した「金のがちょう」に決定した。①児童は一度、この劇をみているので大体のあらましがつかめている。②一人ずつ登場人物が増え、ハンス（主役）の背中にくっついていくという同一パターンのくり返しで劇が進行し、覚えやすくなじみやすい。③木を切り倒していく場面など大きなアクションを振りつけられる場面が多く、児童にはなじみやすい。こうした理由から、「金のがちょう」に決定した。

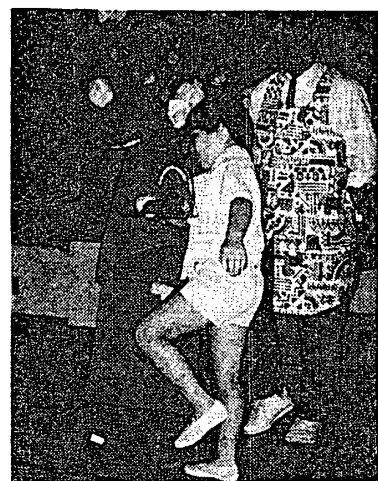
K児を主役にするのは、勇気のいる決断であった。ふだんの生活場面でも5分間さえも落ち着いて物事に取り組めない。また、友だちに関わる時は、叩く、押すなどの非社会的行動が多いK児に果して主役ができるのかどうか。どう考えても失敗する可能性が大であった。しかし、劇のできばえがどうかの問題以前に、児童一人ひとりがどれだけ楽しんで、自分の役を果たしたかどうか。また、仮に劇の流れがつかなくても、その場その場の歌やおどりやアクションにどれだけ没頭し、集中して取り組めたのか。このようなことを大切にしたいと考えたのである。

○K児の取り組みの様子

—K児の劇での主な活動は、次のようなものであった。—

- ・伴奏に合わせて「おお牧場はみどり」の歌をうたいながら、スキップをして登場。
- ・小人とのかけ合いで、おにぎりを渡す。・歌をうたいながら、オノをふるって木を倒す。
- ・金のがちょうを抱いて、列の先頭となって、「手が離れない」の歌をうたって舞台を歩く。
- ・フィナーレで、「友だち讃歌」を歌って踊る。

歌は、大好きなので、取り組み当初から、歌は元気良くうたっていた。4回くらい通し練習をした頃から、動きに見通しがもて始め、歌をうたいながら、場所移動や身ぶりが少しずつ補助者についてできるようになってきた。最終練習日（8回目の練習）では、自主的にセリフを言ったり、場所移動や身ぶりができたりする箇所がいくつか見られた。当日では、写真1のように十分楽しんで劇活動を行うことができた。



この劇活動において、当初、興味・関心の表れとして、劇の途中で自分の役もかえりみず、大道具である木を壊したり、金のがちょうの金紙をはいだりしたが、友だちへの非社会的な行動は見られず、自分の与えられた活動に没頭して協調的な関わりをすることができた。

(2) 生活単元学習「宿泊学習」—調理活動—の取り組み

宿泊学習は、児童の身近処理能力を高めていく上で、重要な単元である。10月初旬から中旬にかけて行なわれるこの単元では、当日行なわれるハイキングにちなんで、弁当づくり（主として「ハンバーグづくり」）を活動の1つに入れて、計4回の調理活動を行った。



○調理活動についての基本的な考え方

できばえよりも、その過程で児童がどれだけ没頭し、集中して取り組んだかということを大切にしたい。お料理を目的的に考えるのではなく、あくまでも児童の物事に取り組む主体性、集中力、判断力、巧緻性を育てるための媒体と考えた。

○K児の取り組みの様子

—K児の調理活動での課題は、次のようなものであった。

- ・キュウリをプラスチックナイフで、食べやすい大きさに切る。
- ・バーガーヘルパーに水とあいびき肉を入れてこねる。そして、ハンバーグの形にする。
- ・ゆで卵の皮むきをする。（10個分）
- ・レタスを食べやすい大きさにちぎる。
- ・自分の弁当箱に、キュウリ、レタス、ウインナー、ゆで卵、ハンバーグを盛りつける。

この活動で、K児が最も没頭し、集中して活動したのは、バーガーヘルパーに水とあいびき肉をまぜる活動である。K児の分化していないからだでも十分できる活動であり、手の感触が楽しいこと、また後でハンバーグが食べれるという後の楽しみがあること等が、K児の集中持続した取り組みを支えたのだと考えられる。また、卵の皮むきもかなり集中して取り組むことができた。これは手先の器用さを必要とする活動であるが、むけたという感触が楽しくて取り組めたのだと考える。

このように調理活動においてもK児は、かなり集中持続して課題に取り組むことができ、他児に対する非社会的行動は見られなかった。この単元もK児の望ましい活動を作っていく上で成果を認めることができた。

4 考察及び今後の課題

以上、K児についての取り組みについて、3つの柱のうちの「からだづくりを通して積極的に望ましい行動を作っていく取り組み」にしぼって述べてきた。これらの取り組みの成果は、K児の集中持続力を高め、友だちとの協調的な関わりができる力を育んだという点で認めることができると考える。また、グラフ(1)(2)で運動感覚分野での伸びが認められるが、これは養護・訓練「リズム・サーキット」でのつま先立ちをはじめとする訓練や休憩時間によく自転車乗りをした成果であると考えられる。さらに、学校生活全般の中で、K児の問題行動を消去し、望ましい行動を強化していく行動分析的な取り組みも、グラフでは、まだ表れていないがK児の日々の行動を見るに成果があったと考える。まだ取り組んで日が浅く、今後さらに実践を充実させ、徹底させていきたい。